

vol. 11

C'n
SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART

日本の版画Ⅱ一九一一—一九二〇

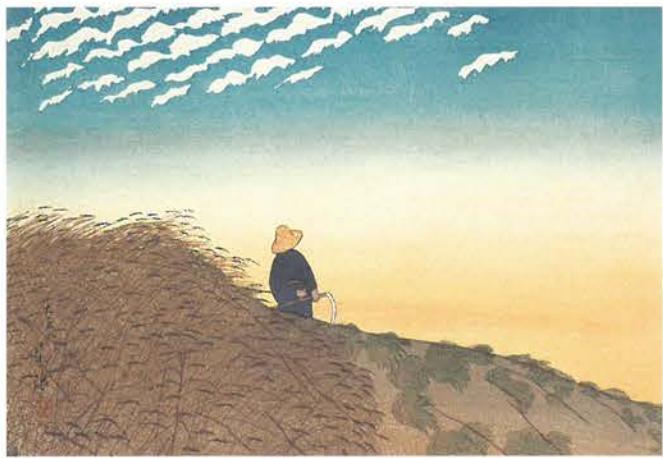
刻まれた「個」の饗宴

平成十一年九月二十一日(火)～十月二十四日(日)



松雲山うらの雲（綾瀬川の対岸）～部分 1949年
東京国立近代美術館蔵

美術の秋を身近に



笠松繁浪〈うろこ雲（綾瀬川の対岸）〉1919年 東京国立近代美術館蔵

早朝に自宅近くの住宅街を散歩していると、どこの家の庭からも虫の音が聞こえています。夜通し鳴いてなお鳴き疲れることもなく、何にせかれて声を立てているのでしょうか。そういうえば朝夕はすっかり涼しくなったものです。

今年はこのほか荒っぽい夏で、雨も多く、晴れれば晴れたで耐え難いほどの酷暑に見舞われて、ほとほとうんざりとさせられたものです。久しぶりに日本の、夏らしい夏だったといえるでしょう。そのせいもあって、秋風の訪れや虫の声がいつもの年以上に快く身にしみて歓迎されるのかも知れません。

どんなに暑い夏もいつまでも続くわけではなく、やがては爽秋となり、さらに寒い冬を経て、ふたたび春を迎えるというように、季節は大枠を外さずに譲りなく巡ってくれます。私たちの暮らしは、そうした自然の営みと歩調を合わせ、折々にふさわしく順応してきたものです。旬の食材を求め、盛りの花を活け、床の間の掛軸を時候の絵柄のものに替えたりすることが、着る物の調節をするのと同じようにどこの家でも当たり前のこととして行っていたのでした。

ところが昨今の、とくに都市部での生活には、こうした格別の季節感を楽しむゆとりがめっきりと少なくなってしまいましました。マンションやアパート暮らしでは、床の間どころか和室さえ無い間取りも増えてきたようですから、四季の情趣を盛り込んだ日本画の掛け軸を飾ることなど、ほとんどの家で忘れられてしまっているに違いありません。

先頃ベスト・セラーとなったアンドルー・ワイル著『癒す心、治る力』(上野圭一訳)は、人間が本来そなえている自発的な治癒力を回復し、高めることを勧める警世の書ですが、その中でワイル博士は、食生活の改善や治癒力を高める天然のトニック(強壮)剤の摂取、あるいは様々な代替療法の試みなどのほかに、家の中に沢山の花を飾ることと音楽や美術を鑑賞することの必

要性も力説しています。

美術館の人間としての我田引水を許していただければ、私にとって大変印象深かったのは、最後にあげた美術鑑賞の、心と身体に及ぼす効用という点でした。といえば、私の周囲でも、美術の愛好家や研究家に長寿を楽しめている方々が目立つことが多いことにも気付かれるのです。どうでしょう、皆様も安い薬代だと思って、美術館へもっとしばしばお出かけいただけませんか。

自宅での美術鑑賞も、無理のない範囲で十分に可能なこと、言うまでもありません。ヨーロッパの印象派の大家の絵となると、天文学的な数字の金額となって普通の人の手には負えませんが、少し名の知られている日本人画家の作品がこんなに安い値段で良いのかと思えるほどの値札を付け、美術商やギャラリーの店頭に飾ってあることも間々あるものです。ましてや複製芸術の版画であれば、どなたでも接近可能というわけです。

先日お邪魔した親日家の外国人のお宅では、居間にも食堂にも、さらにはキッチンや階段の踊り場にいたるまで、家中のあちこちに現代の日本の版画が飾っていました。それらは、木版画や銅版画、あるいはシルク・スクリーンと様々な技法で表された、複数のアーティストによる作品でしたが、いずれもその家のご夫婦の趣味に沿った、しかも現代の息吹きをいきいきと発散している見応えのあるものでした。自宅を小さなギャラリーとして美術を身近かなものとすることが、いかに心を安らがせ、健やかな暮しを約束してくれるものか、卓上に置かれたいくつかの華やかな盛り花の器と併せて、ワイル博士の言葉が実感として納得させられたものです。

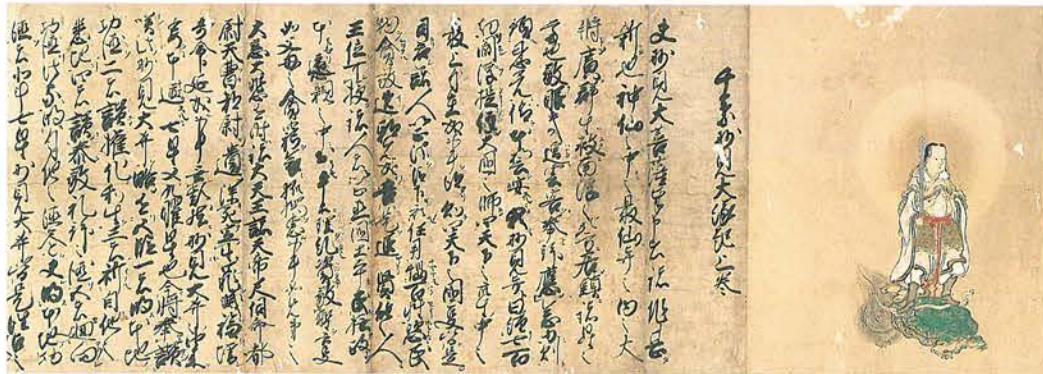
日本の版画というとすぐに江戸時代の浮世絵を思い出されるでしょうが、明治以降現在にいたるまでのその後も、輝かしい個性が次々とこの分野に登場して、曲折に富む軌跡を歴史に刻んできました。日本近代そして現代の版画に対しても国際的な評価は高く、英国の大英博物館をはじめ一流の美術館が競って収集しているのです。

美術を身近にとお勧めしても、個人で実際に版画などを入手することは、なかなか容易なことではありません。先ず手はじめに、ご自身の目を鍛える第一段階が肝要というものです。それには、当館で開催中の特別展『日本の版画Ⅱ・1911-1920・刻まれた「個」の饗宴』が絶好の教場となるはずです。なにしろ会場には、近代日本版画の黄金期の作品が目白押しに展示されているのです。多様な個性の開拓した広い広い美の領域の中から、あなた好みの世界がきっと見つかることでしょう。

食欲の秋も大変結構ですが、美術の秋の方もたっぷりとお楽しみいただければ幸いです。

千葉市美術館 館長 小林 忠

妙見信仰と『紙本著色千葉妙見大縁起絵巻』



(紙本著色千葉妙見大縁起絵巻) 千葉県指定文化財 栄福寺蔵

平成11年11月2日より12月12日まで、千葉市美術館で「房総の神と仏」展が開催される。今回の特別展は古代から中世の仏像・仏画を中心に房総の地に伝わる仏教・神道美術の秀作を県内各地から広く集めて拝観していただく事を目的としたものである。

今回の特徴は千葉市美術館の特別展に歴史・民俗系博物館である千葉市立郷土博物館が共催している点であり、展示の中に「千葉氏と妙見信仰」のコーナーを設け、郷土博物館がこれまで蓄積してきた妙見信仰に関する成果を展示している事である。

このコーナーでは千葉県内の妙見信仰に関する資料を展示する予定しているが、中でも、千葉県指定文化財『紙本著色千葉妙見大縁起絵巻』(千葉県指定文化財、千葉市中央区大宮町内坂尾山栄福寺所蔵、以下『大縁起絵巻』という。)は、関東の名族千葉氏の守護神として知られる「千葉妙見」の由来を「絵」と「詞書」で述べた縁起絵巻である。こうした妙見の縁起絵巻は全国的には数が少なく、この絵巻の外には福島県の相馬市歡喜寺に寛文2年の福島県指定文化財「下総国千葉妙見寺大縁起」(以下『妙見寺縁起絵巻』という。)が残されているのみであり、極めて貴重なものである。

1.『大縁起絵巻』の制作と制作の時期について

『大縁起絵巻』は、千葉市中央区大宮町に所在する天台宗の古刹、坂尾山栄福寺に伝來した「千葉妙見」の縁起絵巻である。栄福寺は寺伝によると平忠常の孫、常永(長)の家臣坂尾五郎治が勧請した妙見宮の別当寺として天承元年(1131)に建立された北斗山金剛授寺を草創とした真言宗の寺院とされる。後、寛永2年(1625)に至って天台宗に改宗し、如意山無量院養福寺と改称した。また、慶安2年(1649)には寺号を栄福寺と改め、更に昭和27年に山号を坂尾山として今日に至っている。

同寺には『大縁起絵巻』の他に『金銅透彫六角釣灯籠』(千葉県指定文化財)と『木造妙見菩薩立像』(千葉市指定文化財)の

2点の妙見に関する資料が所蔵されているが、いずれも下総国白井城主であった原式部大夫胤栄が天正年代初期に制作したもので、白井城の妙見堂に納められていたものと考えられる。これらの資料が栄福寺に伝わった時期については白井城が天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めの

際に豊臣軍によって落城させられたと伝えられていることから白井城落城の直前であった天正16~18年頃と考えられる。『大縁起絵巻』が栄福寺に伝わった時期についても、これらの資料と同時期であった可能性は高い。

さて、『大縁起絵巻』の制作者は奥書から千葉氏の家臣であった本庄伊豆守胤村とされている。本庄氏は千葉氏の一族であった海上氏の支族であり、海上胤方の子盛胤が海上郡本所郷(現在の鎌倉市本町)に住して本庄氏と称したことが始まる。胤村はその子孫と考えられる。なお、寛文2年に北斗山妙見寺尊光院(現千葉神社。妙見宮の別当寺)で制作された『妙見寺大縁起絵巻』の縁起抜によると、千葉介親胤の代に尊光院の警護の武士であったとされている。

この縁起の制作年代については享禄元年(1528)と天文19年(1550)の「奥書」が2つあるが、天文19年の奥書には干支が辛亥とされている事から、後者の制作年代は天文20年が正しいと思われる。このため、『大縁起絵巻』の制作年代は享禄元年と天文20年の2度に渡って作られたものと推定される。

なお、この縁起絵巻は延宝6年(1678)に板倉重直によって大修理されて今日に至っている。

2.「詞書」の筆者について

この『大縁起絵巻』の特徴は、「詞書」が全体に「一つ書き」で構成されていることである。これは、まず、この『大縁起絵巻』が「詞書」だけの縁起として作成され、後に「絵」が加えられて絵巻として完成した事によるものと考えられる。また、現存する絵巻には制作後に補修が度々加えられた痕跡が確認されるが、延宝6年(1678)に至って板倉重直によって全面的な補修が行われている。この時の補修は「絵巻」の調査結果から「絵」が江戸狩野派の絵師によって書き直されており、また、「詞書」についても新たに破損した箇所を補修し、さらに加筆等がなされていることが明らかとなった。

この補修をおこなった絵師については奥書と画風から狩野探幽の門弟であった片山三清守長であると考えられる。なお、現存の「絵巻」の本紙部分には延宝6年以降の補修は認められないが、「詞書」や「絵」には錯款が生じている。

さて、「詞書」は少なくとも5人の筆跡が確認されるが、これらの筆跡は各段に混在して構成されている。これは、「詞書」に破損が生じた際に、その部分を切り落として新たに料紙を補って破損部分を写筆するか、他の縁起を貼り合わせて修理したことによって生じたものと考えられる。

次に、この「詞書」の筆者については、それを特定する資料がないため仮に「甲」、「乙」、「丙」、「丁」、「戊」とする。この内、「甲」の筆跡の「詞書」が縁起の上巻の題と「詞書」のほとんどどの段に登場するが、料紙の劣化が著しいことから判断して絵巻の筆者の中では最も古いものであると推定される。(「甲」筆跡がない段においても「乙」の筆跡の中には、もともと「甲」の書いたものを「乙」が筆写した可能性が高い)。また、「戊」の筆跡は、延宝6年の奥書の筆者と同じものであることから絵師であった片山三清と考えられる。「乙」の「詞書」には写筆の際に生じたと思われる誤写や誤字が多いことから、「詞書」が完成された後、それを写したものであろう。

さて、「丙」の「筆跡」は上巻及び下巻に1ヶ所づつは確認される。この内容が妙見堂の建立と還宮の儀式の記事と関係の深いものであることから、儀式に深く関わった本庄伊豆守と考えられる。更に、「丁」の「詞書」は、「下総州千葉庄池田郷、北斗山金剛授寺妙見大縁起、供分福寿坊四位尊栄、寄進本庄伊豆守胤村」と書かれてる奥書と同筆であることから、「甲」が作成した『大縁起』とは別の「縁起」であったと考えられる。この「縁起」は料紙の劣化の状況から判断して「甲」の「詞書」を制作した時期と極めて近いものであろう。

3、板倉重直と絵師の片山三清

「絵」については前述したように「詞書」が完成した後に描かれたものであるが、この時期については『大縁起絵巻』下巻の巻末に「未来の亀鏡(手本)のために(絵巻)を書き留めた」と書かれている。これは『大縁起絵巻』が妙見堂の建立に関係して制作された事を窺わせる。

なお、この時の「絵」は「詞書」の内容に従って描いたものと考えられるが、当初のものは延宝6年の補修の際にすべて破棄された。しかし、補修前の寛文2年に『大縁起絵巻』を参考にして制作されたといわれる妙見の縁起絵巻(『妙見寺絵巻』)が相馬市の歓喜寺に残されており、この「絵」の場面の一部と片山三清によって描かれた「絵」の一部が構図的に極めて類似

性の高いものがあることから、今日伝わる『大縁起絵巻』の「絵」の中には破棄される前のものを参考にして制作されたものが存在すると考えられる。

『大縁起絵巻』は、前述のように延宝6年に至って坂尾村の領主であった板倉重直によって大規模な補修が行われた。重直は徳川家康の家臣として知られた板倉勝重の孫であり、内膳正重昌の次男であった。重直が坂尾村を知行するようになったのは父の重昌が寛永15年(1638)の島原の乱で戦死し、翌寛永16年(1639)に遺領のうち山城国綾喜、三河国幡豆、下総国葛飾のうちにおいて五千石を与えられてからである。重昌は、さらに万治2年(1659)には従五位筑後守に叙官、寛文4年(1664)には葛飾郡内で三千石が加増になり合計八千石を知行した。当時、千葉庄は葛飾郡に属しており重直の所領には坂尾村が含まれていたものと考えられる。また、寺伝によれば現在の栄福寺は重直の館跡に建てられたと伝えられている事から重直自身もここに住んでいた可能性がある。

さて、『大縁起絵巻』の奥書によると今日残されている「絵」は延宝6年の補修に際して、狩野探幽の弟子の片山三清守長が描いたものであるが、三清は狩野探幽の弟子であり、重直の甥で寺社奉行であった板倉重種の御抱え絵師であった。片山氏は源義光の子孫で丹後の三村に移って三村氏と改称した。この子孫である立賢は武士を嫌って備前・佐渡を流浪した後、晩年は京都に住んだ。立賢の子立徳は京都で医者となり狩野光信から絵を学んだが、これが狩野派の出会いとなった。立徳の子、隆也は光信の高弟であった狩野興以に絵を学んだ後、松平定綱に仕えたが、やがて官を辞して京都に戻り、片山姓に復した。当時、京都所司代であった板倉重矩は京にいた隆也に引見し、隆也の二人の外孫のうち常富を子の重種に仕えさせ、三清を家臣として召し抱えた。三清は寛文8年7月重矩が江戸に戻るこれに同道し、幕府の御用絵師の総帥的立場にあった狩野探幽の弟子として画才を磨いた。そして、重矩が没して重種が家督を継承した後も、そのまま板倉家の御用絵師として重種に仕えていたと考えられる。この三清が『大縁起絵巻』の補修に携わった契機は、延宝6年に板倉重直が領内の栄福寺にあった絵巻の補修を行う際、当時寺社奉行であった重直の甥の重種がこれを積極的に援助し、家臣の三清を派遣したものと考えられる。

今日伝わる『大縁起絵巻』の「絵」は、余白の多い淡白な構図や瀟洒で端正な作風などから江戸狩野派の様式を忠実に踏襲しているものと考えられる。(なお、『大縁起絵巻』の画風や板倉重直及び片山三清については『妙見信仰調査報告書』(平成4年3月、千葉市立郷土博物館発刊)の松原論文を参照した)。

千葉市立郷土博物館 館長 丸井 敬司

「日本の版画Ⅱ」によせて—明治と大正のあいだ

1911年5月、萬鐵五郎（1885－1927）や広島新太郎（晃甫・1889－1951）たちがグループ「アプサント会」を結成して本郷の東京帝国大学前の喫茶店パラダイスで第1回展（同人小品展）を開催した。

木村荘八（1893－1958）によれば「長髪垢面の画人が文字通りアプサントを傾けつゝ、同時に油絵展覧会をやった様な工合式」だったという。木村のことばをそのままに受け取れば、展覧会をやるためによりも、むしろ美術学校の氣の知れた仲間たちがみんなで集まってワイワイやろう、というものだった。

この展覧会には、同人たちの作品のほかに、自画像を含む青木繁（1882－1911）の遺作2点が展示されていた。青木は展覧会が開催される2ヶ月前の3月、放浪の末に福岡で亡くなっている。アプサント会の同人たちがこの画家にどのような思いを持っていたかは想像の域を出ないが、明治の浪漫主義を代表する画家を学校の先輩としてあこがれ、尊敬していたことは確かだろう。画家としての青木の短い活動のなかで絶頂期は美術学校を卒業した夏に制作した〈海の幸〉（1904）あたりであり、美校生だった萬などが青木の作品に接することができる機会はそれほど多くなかったはずである。加えて、1907年に第1回展が開催された文展に青木は落選を重ねている。文展に落選する事は当時の画壇からは認められない存在であるということと等しい。

青木は、日清（1894－95）・日露（1904－05）の両戦役を通じて明治という近代国家が創生される過程と画家としての自己を日本神話という太古の物語のなかで融合させ、高らかに謳い上げようとしていた。それが、彼にとっての浪漫であり、どうしても画壇、つまり国家に認められなければ（文展への入選など）その思いは成就することができない性格を持っていた。しかし、アプサント会の同人たちが「画壇に拒否された青木」という存在を自分達の先輩として掲げることは、青木のあり方と正反対の姿勢である。

萬たちは、青木とは異なり、国家と自分たちの間に距離を感じていたといえる。

※

国家と自分との距離感の自覚は、萬たちだけではなく当時の学生を中心とした若者におおくあらわれている。以下、この時代の氣分について、ふたりの版画作家、竹久夢二（1884－1934）と恩地孝四郎（1891－1955）を中心に点綴してみたい。

日露戦争中から、国の利益と国民の幸福がかならずしも一致しないことが明白となりだした。それにたいして、若者たちのなかで日々生きている「私」とは何かと考えてしまったものたちは哲学や文学にはしり、徴兵や重税によってつかれ切ったひとびとの生活をなんとかしよう、と思えば社会主義や労働運動に関心を寄せた。たとえば、日露戦争さなかの1905年には少佐の倫理学者、

綱島梁川がみずからの見神体験を発表し、大きな反響を呼んでいる。その支持者のなかには石川啄木や、まだ画家として頭角を現す以前の岸田劉生（1891－1929）などもいた。そして、ちょうどこの時期に実質的な活動をはじめた夢二にとって主要な寄稿の場となっていたのが幸徳秋水たちによって創刊された『平民新聞』系の雑誌・新聞だった。

もっとも夢二のばあいは、彼の資質として思想活動や実践的な運動などは得手ではなかった。社会主義運動の現場には自分たちを明治維新の志士になぞらえたり、任侠的な気分があった。彼は、じょじょに自分の身を別の場所に置くことになる。

1909年の暮、それまでのカットなどを編集して『夢二画集春の巻』を発行、爆発的な人気を博し、翌10年には続編がつぎつぎに刊行され、これによって新進画家としての地歩を固めた。うれいがちな眼、細く長い女性像は「夢二式（調）」と呼ばれて一世を風靡することになるが、画面にただようロマンティシズムは妙にけだるく、やるせない。特にその瞳。明らかに立身出世とか富国強兵、加えてそれに反対する陣営といった、「明治」の原理から外れた者（落伍者）の視線によっている。当時白馬会葵橋洋画研究所で学んでいた恩地は、そんな夢二の描く「瞳」の表現に魅せられた若者のひとりだった。

『夢二画集』がほぼ出揃った1910年、明治天皇暗殺を計画したとの容疑で秋水をはじめとするおおくの社会主義者・無政府主義者たちが理由もなく弾圧・処刑された。大逆事件である。事件の真相はそもそも公表されぬまま年末にあわただしく裁判が行われ、翌年早々には秋水たちが処刑された。秋水の通夜には夢二の姿もあった。確実に、若者たちの視線は外から内に向かわざるを得ない状況に追い込まれていく。この翌12年、元号は明治から大正に変わった。

さて、ここまで夢二について語りながら、この稿ではこれまで、彼の作品について、その描かれた女性像のうわべだけをなぞっただけに過ぎない。たしかに、夢二の作品を見る側は描かれた女性像に幻惑されてしまう。その女性像に「ここではないどこか」へ誘われるような思いを持つ。どこに誘われるのだろう。

これまでに数多く記された夢二論のなかでも私が興味を持ったのは、彼の肉筆画において小倉忠夫がこころみた「大正の文人画家」という位置付けである。小倉氏は、夢二が職業的な画家ではなくあくまで素人画家であり、専門的な画技にとらわれない態度、そして何よりも詩的な文学性が作品に反映されていることから彼を文人画家としている（『近代の美術 23 竹久夢二』）。

文人画は、「公」の絵画ではなくどこまでも「私」のものであり、公に対峙するほどの強烈な「私」の意識（自我）によってはじめて「胸中ノ山水」が獲得できるとされる。小倉氏の説に従え

ば、ここではないどこか、とは夢二じしんの内部世界と考えることができないだろうか。このように考えるとするならば、夢二は、彼じしんの内部世界を見つめ続けるために、彼が距離を置いたいわゆる「主義者たち」が現実の世界で国権に対峙するために費していたエネルギーと等量のものを必要としていたことになる。

ここで思い出されるのは、やはり『平民新聞』に漫画を投稿していた小川芋銭（1868－1938）が茨城・牛久に住み続け、反近代的なばけものたちを主人公とした文人画を描き続けていたことである。夢二の絵に描かれていたおおくの女性たちは（かりにモデルがいたとしても）、芋銭が描く河童などと同じ世界の住人だったのだ。しかも、文人画はお雇い外国人フェノロサの講演『美術真説』（1882）いらい、この国で絵画が近代化するために否定されるべき存在とされていた。

※

1913年、恩地と藤森静雄（1891－1943）、そして田中恭吉（1892－1915）の三人は語らって詩と版画による同人雑誌を計画していた。彼らの雑誌『月映（つくはえ）』が創刊されたのは翌年14年、その次の年には田中の死がきっかけとなって終刊号（告別号）を出している。

恩地たちが描こうとしたのは、夢二よりも一步踏み込んで、自分たちのこころの願いとか、こころそのものだった。

こころの願い、は図式化して描かれている。

その構図はきわめて単純であり、田中の〈冬虫夏草〉（1914）に見られるように、だいたいにおいて画面中央の上部に発光体（おおくは太陽）を配し、その真下に人間が描かれている。発光体はあらゆる宗教に通ずる「神」をあらわし、「神」に導かれて、自己のたましいが生長するというものである。これは『月映』の版画だけでなく、それ以前から、雑誌『聖杯』（のち『仮面』）で活動していた永瀬義郎（1891－1978）や長谷川潔（1891－1980）、あるいは劉生に代表されるフュウザン会や初期草土社に加わった画家たちの作品に見られる奇妙な宗教画の一群も本質的におなじような意味を持っている。このような作品の背後に、さきにあげた見神体験を表明した梁川などの思想的影響を想像することはさほどむづかしくない。

では、現在の自分から、一步一歩、神に近い「まったく人間」になる、という願望は図式化され得るとして、現在の「こころ」のありのままのすがたはどのように描くことができるのか。「こころ」は当然ながら見ることができない。これは自分のものも他人のものもそうである。

とくに、自分の「こころ」というやつは存在するであろう予感がありながら、さだかではない。それをどう表現し、他人に

伝えようとするか。自分の怒り、悲しみ、あこがれといった感情（こころ）のふるえを線や面、色によって直接表現すること—抽象的表現のめばえである。恩地の〈抒情I〉（1914）は、その過渡的な作品として重要である。自分のこころのまなこ—これが夢二の描く女性のまなざしと等質なものであることに注意したい—によって映し出される内面の世界。不可視のものを見るようにすること。

2年間に世に出た『月映』は合計13冊を数えるが、現在遺されているかれらの作品を見ると、ムンクとか19世紀末の象徴主義の影響を反映した心象表現（主に藤森・田中）と、今世紀の抽象絵画の動向（恩地）が同居していることに気づかされる。

じつは、この同居こそが1945年以後あるいは現在までつづく日本の絵画における抽象的表現の大きな性格となっている。のちに、恩地は心情を吐露するようないわば私小説的な抽象から、より純粋な形態を追求した抽象を目指すようになっていくが、その後の日本における抽象絵画、前衛美術のおおくが私小説的だったということは、『月映』成立前後の彼らをとりまく状況をかんがえると興味深い。

1910年代は、たしかに若い画家たちにとって疾風怒濤の時代だった。個性がつぎつぎと開花した、たぐいまれなる時代と言い換えてもいい。ただし、それは、限られたワクの中で彼らがかろうじて見つけ出した世界ではなかったか。

※

1910年以降の夢二は時代の気分を確実にとらえた作家として大衆に支持された一方で、アヴァンギャルドを目指す若者たちに対するよき理解者だった。関東大震災（1923）のおかげで結局実現することはなかったが、恩地などと図案社を計画していましたし、また、私が以前「マヴォ」の同人を取材した際、彼らが銀座の夜店で複製画を売るアルバイトをしていたおり、夢二がいろいろ買ってくれたことを懐かしく語ってくれた。彼らのすがたに、かつて自分が離れていた『平民新聞』の仲間たちのおもかげを重ねていたと考えるのは早計にせよ、未来に向かって進もうとする若者たちを応援する気持ちがあったのだろう。

ところで、明治末から大正期を代表する同人雑誌『白樺』と夢二との関係は？ あの『夢二画集』と『白樺』は同じ出版社（洛陽堂）から発行されており、何らかの交渉があったかも知れないが、手元に資料が乏しく詳らかではない。同人のひとりだった志賀直哉が有島生馬（1882－1974）と不仲になった理由のひとつは生馬が夢二の作品を評価していたことだった（阿川弘之『志賀直哉 下巻』）。ここでは、このことを紹介するだけに止めておくことしたい。

本館学芸員 薫科英也

展覧会スケジュール



富本憲吉（花）1912年
富本憲吉記念館蔵

□日本の版画Ⅱ 1911－1920 刻まれた「個」の饗宴

9月21日㊂－10月24日㊁

日本の近代版画にとって1910年代とは、1900年代に耕され、種を蒔かれた「版」という分野に、いよいよ実りの時が訪れた季節にあたります。印刷術と結びつきながら扱い手を増やし、表現手段として見いだされつつあった「版」に、より切実で野心に満ちたまなざしがそぞがれ、時の芸術思潮を色濃く反映した名品の数々が生まれた、まさに近代版画の黄金期です。

本展は1997年秋に開催しました「日本の版画Ⅰ・1900－1910・版のかたち百相」に続く第二弾であり、出展作品の約3分の1を当館所蔵品により構成します。

□平成11年度 千葉市美術館新収蔵作品展

9月28日㊂－10月24日㊁

千葉市美術館は平成7年11月に開館して以来、はや4年を迎えようとしています。

良質な展覧会を開催する一方で、地道な調査活動や作品収集を継続して社会に貢献することも現代の美術館に求められる重要な役割です。今回の展示は、平成9年および10年度に収集した主なものをお紹介します。

出品作品は日本の作品や海外作家の作品、また時代も江戸から現代とさまざまですが、いずれの作品も興味深くお楽しみいただけます。

□房総の神と仏

11月2日㊂－12月12日㊁

房総の地に、神道・仏教文化が波及したのは、7世紀ごろといわれています。その当時から現在にいたるまで、関係するさまざまな作品が生み出されていますが、その全体像をとらえようとした展覧会はこれまで開催されたことがありませんでした。

本展は房総の神社・仏閣をはじめ関係する博物館の協力を得て、古代から中世の仏画・仏像をはじめとして、この地に伝わる神道・仏教美術の優品を一堂に会し、その全容を紹介するものです。



（紙本着色千葉妙見大縁起絵巻）
千葉県指定文化財 荘福寺蔵

【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中

【開館時間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）

【ハローダイヤル】043-227-8600

※展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。



耳鳥斎（にちょうさい）『絵本古鳥図賀比（えほんことりづかひ）』
文化2年（1805）刊 絵入版本 三巻合一冊 25.6×18.0cm

千葉市美術館蔵 ラヴィッツコレクション

これは江戸時代後期に出版された本の1ページです。文字が昔の字で容易には読めない、ということを除けば、ほとんど現代のマンガのひとコマを見ているかのような画風です。鼻のない顔に点だけの目。横顔などは半円形に開けた口で向こう側が見えています。よく似た作風のマンガが思い出される読者もおられることでしょう。実際、この絵がこの夏の「絵巻物—アニメの源流」展で多くの写真と共にパネル展示された折、取材に来たあるテレビ局のディレクターはすらすらと数人のマンガ家の名をあげ、最もテレビ的にわかりやすい絵の一つだと、番組で放映していました。

わずかな線で人々の雰囲気をすばり捉えて描く、この才氣あふれ

る愉快な絵描きの名は、耳鳥斎（にちょうさい）。俗称を松屋平太左衛門という、大坂生まれの粹人です。はじめ酒造業、のち骨董商を営んだといいますが、本業はさておき、戯作も手がけ、常に芝居の世界に親しみ、本人も素人淨瑠璃や滑稽淨瑠璃を得意として北新地芝居へ出演するほど。しかし何よりこのような「マンガ的な」絵の達人でした。簡潔、誇張、的確、滑稽、洒脱、あたたかみ…そんな耳鳥斎の特質が凝縮された絵本に『絵本水や空』（安永9年（1780）刊）という役者の舞台姿絵集がありますが、実はこれは、上方の最初の役者絵本であったという歴史的意義も持つ人です。

この『絵本古鳥図賀比（えほんことりづかひ）』は、「こと」を「つがわせる」（=組み合わす）、例えば「養生」と「不養生」、「大胆者」と「臆病者」などを対照させるように並べ、人物の横にその胸中をあらわす文やセリフなどを書き込んだものです。極端な人の性質が持つおかしみを、文と絵によって鋭く描き出しているのです。掲出の場面は「ねんしゃ（念者）」の一部。「ちしゃ（智者）」と対比されています。

この本は、アメリカの人類学者ロバート・ラヴィッツ氏が収集した日本の絵本コレクションの中の一冊です。江戸時代を中心に明治・大正期のものも含む、各流派を網羅した世界有数のコレクションで、本館ではこれを1995年から3年にわたって購入しました。様々な意味で情報の宝庫である本が300冊以上。冊子は一場面しかお見せできないことが多いのが残念ですが、工夫を凝らし、折に触れてご紹介してゆけること思います。

本館学芸員 松尾知子

美術館のご利用あります

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1 階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7 階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

〔営業時間〕11:00~21:00

- JR総武線千葉駅
 - 東口より徒歩約15分
 - 京成バス大学病院行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩約2分
 - 京成バス矢作台市営住宅・川戸行（のりば⑦）あるいは
小湊バス八幡宿駅行（のりば④）「広小路」下車徒歩約1分
 - 千葉都市モノレール県庁前行（「葭川公園」下車徒歩約5分）
 - 無料巡回シャトルバス「チーバス」（のりば⑯）「中央区役所・美術館前」下車
(11:05～18:35の毎時05分と35分に発車・水曜運休)

■京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

